

弥生人と 土器と 植物



今から二千数百年前の弥生時代、この地域にも人々が暮らしていました。大昔のことだからと、あまり身近には感じられないかもしれませんが、同じ土地に住んでいたご先祖様達のことです。周辺環境はそこまで大きく違います(多分…)。というのも、彼らが作った土器には、今も身の回りに見られるような身近な植物の痕跡が残されているのです。

そこで今回は、国史跡の泉坂下遺跡で発掘された弥生土器に見られる植物をご紹介します。

◇オオバコ

下の写真の土器は、一見すると普通の縄文の文様が付けられているように見えますが、実はオオバコの穂でつけられたと言われています。

オオバコは、踏みつけに強いので、人や車が通る、他の植物が長く伸びていない場所にまとまって生えています。薬草にもなりますが、根が長く、引っこ抜くのに苦労する雑草でもあります。



▲オオバコ（左）とオオバコ文様の土器（右）



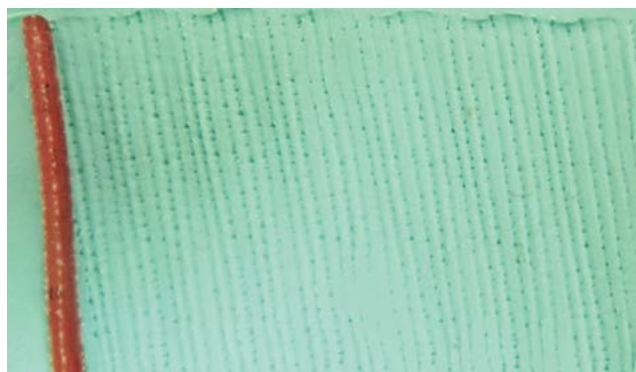
▲実際にオオバコを転がした文様

◇カナムグラ

もうひとつ良く利用されるのが、カナムグラです。小さなトゲがついたツタで、やぶに沢山生えているので、足や腕がチクチクして痛くなった経験がある人も多いのではないのでしょうか。



▲カナムグラ（左）とカナムグラ文様の土器（右）



▲実際にカナムグラを転がした紋様

わざわざトゲのついたツタを選んでいることから、縄文のつづつづを表現したいという意図を感じます。こうした植物で付けられた文様は、弥生時代の中頃に「^{ぎじょうもん}偽縄文」と呼ばれています。



▲本物の縄の文様

きっと弥生時代の人々は、身近にあった植物を使い、縄文に似た文様をつけたのでしょう。そしてその植物は、今も私たちの身近にあります。